
魔法少女リリカルなのは～ベルカの銀龍が麻帆良に行く～

ジオニックフロント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜ベルカの銀龍が麻帆良に行く〜

【Nコード】

N6258P

【作者名】

ジオニツクフロント

【あらすじ】

時空管理局執務官『フィーナ・ペンドラゴン』に1つの任務が言い渡された。それは、とある人物の護衛と管理外世界へ逃げ込んだ違法魔導師の捕縛だった。そして護衛の為に現在通っている学校から転校する事に・・・、その転校先というのが・・・「ええ！？女子中！？ちよつと聞いてないんですけど！？」『フィーナ（男）』に襲い掛かる女子中学生パワー！！「俺、この任務が終わったら休暇を取るんだ・・・」

魔法先生ネギま！と魔法少女リリカルなのはのオリ主クロスオーバー
です。

ブローグへ転校？あ、任務ですかそうですね

次元航行艦アースラ 執務室

「地球・・・麻帆良学園？」

前の任務を終え、その報告をしている途中にクロノから新しい任務を言い渡された。

それは第97管理外世界「地球」、日本国麻帆良においてとある2人の人物の護衛を頼まれたのだ。

「そうだ、先日関東魔法教会から要請があった。本来ならば向こうとはお互いの事は手出し無用という協定が秘密裏に結んであったが、向こうで魔導師らしき人物を発見したらしい。」

「なるほど、それじゃ俺はその魔導師の調査と捕縛だな？」

「ああ、話が早くて助かる。向こうには留学生として学校へ潜入、護衛をしながらその魔導師を捕獲してくれ。これが護衛対象のリストだ」

渡された紙には2人の男女の名前が記されていた。

1人は、近衛木乃香。

関東魔法教会理事の孫で、極東でトップクラスの魔力を秘めているらしい。

そしてもう1人の護衛対象、その名前を見た時に俺は驚愕した。

「ッ！？ね、ネギ！？」

「どうした、知り合いか？」

「あ、ああ。俺が海鳴に引っ越してくる前はイギリスのウェールズにある小さな村に住んでたのは知ってるよな？」

「ああ、確かそんな事を言ってたな。・・・まさか！？」

「ああ、コイツ俺の家の向こう隣に住んでたヤツだ。しかも、俺にかなり懐いてたし」

ネギが護衛対象ってなんだよ・・・。あれか、村の連中が言ってた英雄の息子だからか？

だとするとネギも難儀な人生してんなあ・・・。

「そうか。だが、言い方は悪いがこれなら任務もしやすいだろう？」

「ん？ああ、そうだな。で、何時から？」

「現地時間で来週からだな。新学期からの転入になっている」

来週ね……。とりあえず荷物は最低限にして後は向こうで買うか。

「あ、つーことは海鳴の学校はどうすんだ？」

「心配するな、既に転校届けを出してある。……。母さんが」

「……………そうか」

リンディさん、アンタ、手回し早すぎだよ。まったく……………。

「とにかく話は以上だ。期間は卒業までの1年間。頼んだぞ」

「ういいうい、まかせんしゃい」

形だけの敬礼をし、執務室を後にする。

そのまま自室へと戻り今日の仕事の疲れを癒すべく眠りへと落ちて行った。

クロノが微妙に同情を含めた苦笑いを浮かべていたのが気になるがまあなんとかなるでしょ。

ブローグゝ転校？あ、任務ですかそうですね（後書き）

いかがでしたか？

感想、誤字脱字の指摘、アドバイスなどお待ちしております。

第1話くえ？女子中！？そんなの聞いてないんですけど！？」

日本 麻穂良学園

「おお、此処が麻帆良学園・・・デケエな」

《確かに学校にしちゃデケエな。海鳴ぐらいはあんじゃねえか？》

「かもな？とにかく今は学園長室を探さない」と

《んじゃ、手っ取り早く誰かに聞けばいいんじゃないか？そこの嬢ちゃんなんかどうよ？》

フリーンが指したのは、髪をサイドアップにして、竹刀袋を担いだ少女だった。

「ん？いいんじゃない？そうすつか」

この学園の制服を着ていたので、早くて済むなと思い、小走り気味に近づき声をかける。

SIDE 刹那

「ちょっと道を聞きたいんだけどいいかな？」

学園長に呼ばれ、学園長室に向かう途中に流暢な日本語で話す、銀髪の外国人の男性に声を掛けられた。

「はい、なんでしょう？」

「学園長室に行きたいんだけど、生憎場所までは詳しく聞いてなくてね。何処にあるか教えてくれるかな？」

そういえば、先日客が尋ねてくるといふ話をしていた気がする。もしかしたらこの人なのだろうか？

「でしたら私も丁度向かう所ですから一緒にしますか？」

「そうかい？なら、お願いするよ」

そう言つて微笑む彼。

その佇まいや歩く姿勢や重心の動き方から相当な手練と見える。一体この人物は何者なのだろうか。

どこかで会つたような気がするのだが果たして何時だったのだろうか？

SIDE 刹那END

SIDE フィオナ

たまたま声を掛けた同い年ぐらいの女の子。
日本に引越してから間もない時、京都を観光した時に会つた女の子に似ている気がした。

「そつだ、名前聞いてもいいか？」

「名前、ですか？」

「そう。ちなみに俺はフィオナ。フィオナ・ペンドラゴン。仲のいい奴はフィオって呼ぶんだけどね」

「はぁ・・・？刹那です。桜咲刹那」

桜咲刹那・・・。刹那・・・せつな・・・？
あれ？やっぱり？

「「あの」」

「「あ、先にどうぞ」」

見事にシンクロしてしまう俺達。
念話でクツクツクツと堪え切れていない笑い声をもらすフリーン。
お前は少し黙っているってーの。

「ああ、えつと・・・。桜咲さんはさ、京都に住んでた事ある？」

「え？あ、はい。ありますけど・・・。あの、もしかしてフィオちゃん？」

「うん、そうだよ。久しぶりだね、刹那？」

「ウソ・・・。ホンマにフィオちゃんなん？」

「あはは、そうだけどフィオちゃんはやめて欲しいかな？俺、男だし」

「え！？フィオちゃん男やつたん！？」

「うん、男だよ？」

やっぱ女に見られてたのか……。通りでフィオちゃんなんて女の子みたいな呼ばれ方してたわけか……。憶えてくれてたのは嬉しいけど、微妙にショックだなあ……。

「その、ごめんな？ウチあんときは女の子や思ってたん」

「いや、大丈夫。それより、学園長の所行かないと」

「あ、そうやね」

その後、なぜ女子部の方に男がいるのか？と諸先生方に訊問を受けたり、刹那のクラスメイトから俺は刹那の彼氏なの！？などと紆余曲折もあつたが無事、学園長室に辿り着いたと明記しておく。

だが、このとき俺はまだ分からなかった。

クロノが別れ際に浮かべていたあの儚い微笑の意味を……。

麻帆良学園 学園長室

「時空管理局特別捜査官フィオナ・ペンドラゴン一等空尉であります」

敬礼をしながら挨拶する。正面にはこの学園及び関東魔法教会の長である近衛近右衛門氏。

その横には刹那が立っている。

「ふおおおお、よく来てくれたの。楽にしてよいぞ」

「はっ、失礼します」

「さっそくじゃが、仕事の内容は知ってはおるのう?」

近衛木乃香とネギ・スプリングフィールドの護衛。クロノの説明の後も何回か資料をよんだからこれはバッチリだ。

「はい、存じております」

「ならば、話は早い今日から転入生として女子中等部3-Aに編入となるからの」

ふむふむ、女子中等部に編入ね・・・、女子中等部・・・、じよし・・・、女子!?

「「女子イツ!?!」」

「ふお!?!なにか問題でもあるのかの?」

「大アリです!!学園長、フィオナは男です!!」

「ふお!?!それは本当かの!?!」

「本当です。私は正真正銘男です」

なるほど、クロノのあの笑みはこの事だったのか。大方、リンディさんがやったのだろぅが・・・。

ふむ、あの3人に報復をお願いしておこう。クッククック。クロノ、君はいい友人だったが、君の母上がいけないのだよ？

同時刻 アースラ

ゾクゾクッ

「うあッ!？」

「どうしたの？クロノ君、風邪？」

「いや、大丈夫だ」

フィオナか？いや、まさかな・・・。

その数時間後、フィーナからの報告を受け、やってきた海鳴魔導師3人組＋守護騎士数名により、NANOHA式でO・HA・NA・SHIをする事になったのは言うまでもない。

麻帆良学園 学園長室

「むう、それは困ったのう」

「はぁ・・・？」

俺が男である事を説明した後、話は難航していた。護衛対象が2人共女子部にいるそうで、男子部ではどうしても護衛には向かないらしい。

「ふむ、面倒じゃ特例としてフィオナ君の3 - A編入を認めよう」

「い、いいんですか!？」

「うむ、権力は使うものじゃよ?」

「はぁ・・・」

それでもダメなものはダメなんじゃないかなあ・・・。とも考えた
が他にいい案も思い浮かばないので了承する事になった。

「今のところはそれぐらいかのう。あとこれは個人的な頼みなんじ
やが、深夜に行われている学園内のパトロールに参加して欲しいの
じゃよ」

「ふむ・・・一応、理由を伺っても?」

任務外において、管理外世界であるこの地球において魔法の行使は
自己防衛以外に認められていない。だが、今回のような要人護衛の
任務は相互の信頼関係が円滑でないと難しいのは火を見るより明ら
かだ。受ける受けないはともかく理由を聞いておいたほうがいいだ
ろう。

「ここに来る途中に湖の上に立てられている大きな建物は見たかの
?」

「ええ、まあ外見だけです・・・それがなにか?」

「あそこは図書館島と言つての、表では一般生徒にも開放されてい
る巨大な図書館なのじゃ、蔵書数も軽く万は越えるじゃろう」

「表・・・ですか？ということはその図書館島にはまた別の一面がある？」

「いかにも、あそこは地下深く増築が進んでいての、地下に行けば行くほど貴重な魔導書などの書物が保管されておるのじゃ」

「つまり、それを狙った賊が侵入を試みる連中が居ると？」

蔵書の数が万を越えてる時点でも驚くことだが、魔導書まで保管してあるのか・・・、おそらく厳重な封印処理は施してあるのだろう。少し、興味が湧いてきたな。

「その通りじゃ、とは言ってもこれは時空管理局に依頼したことは含まれておらん。別に断ってくれてもよいのじゃ、じゃが受けてくれるのなら別途に報酬を出そうと思う。どうじゃ、引き受けてはくれんかのお？」

「・・・わかりました、引き受けましょう。ただ条件がいくつか」

「ふむ、条件とは？」

「時間があればいいので、図書館島内部の調査の許可をいただきたい。それと調査した際に発見した物の中でコチラ側の物があれば、お互いが確認し合意の上であれば、その譲渡を」

「ふむ、いいじゃろう。ワシらとしても使用方法もわからないものが置いてあっても危険なだけじゃしの」

「では、契約成立ということだ」

「おお、そうかそれじゃ、よろしく頼むぞい」

「非才の身ではありますが、全力で受け賜りましょう。ところで私はどこに住めばいいのでしょうか？」

「あー、それなんじゃが・・・先ほども言ったとおり護衛に来るのがてつきり女の子だと思っておつてのう」

「え、ええ、それはお互いの確認不足なのでしょうがないといえましょうがないでしょう」

「が、学園長・・・まさかとは思いますが、もしかして・・・」

そこに今まで沈黙を保っていた刹那が声をあげる。さらに言えば俺の第六感と言うヤツがギンギンと警笛を鳴り響かせている。・・・嫌な予感がしてきたな・・・。

「うむ・・・。女子寮・・・なんじゃよ・・・。」

「・・・この任務、達成できないかもしれないな。」

第1話へ？女子中！？そんなの聞いてないんですけど！？（後書き）

いかがでしたか？

感想、誤字脱字の指摘、アドバイスお待ちしております！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6258p/>

魔法少女リリカルなのは～ベルカの銀龍が麻帆良に行く～

2011年11月13日04時36分発行